報告　風力発電推進プロジェクト

七ヶ宿町の自然エネルギー利用

3 月 26 日（土）に七ヶ宿町活性化センターにて「自然エネルギーを活かしたまちづくりシンポジウム in 七ヶ宿」が七ヶ宿町と MELON の共催で行われました。三浦秀一助教授（東北芸術工科大）からオーストリアにおける木質ペレットの利用例などの紹介、川崎町の菊地重雄さんから地元資源を市民主体で活用している例の紹介がありました。

パネルディスカッションでは、七ヶ宿町の高橋國雄町長から町の自然エネルギー活用に向けた取り組み、七ヶ宿町住民の小山真光さんからは森林整備の重要性と雇用の問題、MELON の小澤義春事務局次長からは風況調査の結果と今後の方向性について報告がありました。シンポジウムには町の内外から 78 名の参加者が集まり、関心の高さが伺えました。

七ヶ宿町では現在、七ヶ宿ダム水源地域ビジョンの策定が行われており、MELON も関わっています。今後は風況調査以外でも関わりを持っていきたいと考えています。

パネルディスカッションの様子

人間にドードーという名前を

一匹もいなくなってしまったあるいはこのままではいなくなってしまうかもしれない野生の生き物がたくさんあります。レッドデータブックというのは、国際自然保護連合という国際的な団体が作った、このような生き物のリストです。日本でも環境省や各県、いろいろな団体でも作られていますのでインターネットで見てみるのもいいでしょう。私たちがときどき耳にする生き物もふくまれていて、おどろくことがあります。日本ではほ乳類では多くのコウモリの種類が、また両生類ではいろいろな種類のサンショウウオ類やカエル類などもあります。数が少なくなる原因はいろいろありますが、人間の活動がかなり大きく影響していることがあります。

ショーン・ライス絵、ポール・ライスとピーター・メイリー文、斉藤たける訳、「ドードーを知っていますか」（福武書店）はすでにいなくなってしまった動物たちです。人間が食料にしたり、むりやり環境を変えたりしたために滅（ほろ）びてしまった生き物たちが描かれています。この本は図鑑ではないので、一つ一つの滅びた生き物の物語として読むことができます。そうだ。お母さんたちなら、一つ一つの動物たちの紙芝居を作ることだってできるかもしれませんね。

絵に描かれた動物たちの、まるっこい、ビーズのような目を見てください。目の中にこの動物たちを食べたり、見せ物にしたりする昔の人間のたちの姿だけでなく、今の人間の姿も見せつけられているような気がするではありませんか。「太りすぎて飛べなかったり、走ろうとするとおしりが地面にぶつかってしまう」その姿からポルトガル語で「おばかさん」という意味のドードーという名がつけられたらしいのですが、ほかの動物を滅ぼす人間にはどんな名前をつけたらいいのでしょうか。